

〈論文〉

張作霖爆殺事件と東京裁判

横 島 公 司

はじめに

一九二八（昭和三）年六月四日、当時「満州」の実質的支配者であった張作霖が乗車する特別列車が、奉天城からほど近い皇姑屯の満鉄線と京奉線のクロス地点において突如爆破されるという事件が起こった。いわゆる「張作霖爆殺事件」である。

この事件は、勃発直後から日本軍人による謀略と噂されていた。そうした声を踏まえ田中義一首相は、「張」作霖横死事件には遺憾ながら帝国軍人関係せるものもあるものの如く、目下鋭意調査中なるを以て若し事実なりせば法に照らして厳然たる処分を行う」と昭和天皇に上奏した。そして調査の結果、事件は関東軍高級参謀河本大作的の犯行であることがほぼ明らかとなったが、陸軍は真相を公表することに反対の姿勢を示した。追い込まれた田中は、翌二九年六月二七日、責任者の行政処分によって事件の処理を行いたいと上奏するが、天皇は「おまえの最初に言ったことと違ふぢやないか」と田中を「叱責」したのである。このとき昭和天皇は、「田中のいうことはちつともわからぬ。再びきくことは自分は厭だ」と語ったとされる。田中は天皇の誤解を解こうと翌日参内を試みるが、鈴木貫太郎侍従長から「たつて拝謁を願われるならお取次ぎは致そうが若し某重大事件に関することなら恐らくお聴きになりますまい」と告げられる。こうして張作霖爆殺事件は、昭和天皇の「叱責」によって内閣総辞職という、日本憲政史上例のない事態に発展するに至ったのである。

こうした事実の多くは当時の政府関係者、マスコミ等の知るところであった。しかし田中内閣が発した記事差止命令によって、この事件は「満州某重大事件」と通称され、一般国民には事件の真相は戦前期を通じて

一切あきらかにされてこなかった。東京裁判における田中隆吉の証言によつて、事件の真相が白日のもとに晒されたのち、事件関係者本人または関係者の聞き取りをもとにした著作や論文の発表が相次いでなされた。さらに日本近現代史・日中関係史の分野から軍部や宮中側近の動向、そして昭和天皇との関係といった観点からの説明が進んだことで、現在は事件に関する事実関係はほぼ立証されているといえよう。少なくとも同事件に関しては、相当な新史料の発見でもない限り、こうした「定説」が大きく書き換えられることは難しいように思われる。

本稿も、同事件に対し、新たな事実をさらに付け加えようというものではない。だが、張作霖爆殺事件をめぐることは、当該期の政治外交面において優れた既存研究が数多くある一方で、東京裁判との関係からはこれまであまり語られてこなかったように思われる。

それゆえ本稿では、張作霖爆殺事件を東京裁判との関係から改めて整理を行なつたうえで、東京裁判における「訴追」と「免責」の論理のなかでこの事件はどう扱われたのか。こうした観点から、若干の検討を行なつてみたい。

一 起訴状とのかかわり

東京裁判の起訴状において、日本の行った侵略戦争の共同謀議のはじまりは一九二八年一月一日よりはじまると規定されている。従つて、起訴状から見ると、検察側は田中内閣から侵略戦争の計画、準備が開始されたことを認識していたことになる。その理解が正確なものであるかどうかは、本稿の検討課題ではないが、それでもなぜ田中内閣から、日本の侵略戦争に対する共同謀議のはじまりであると検察側が規定したのかについては、考えておかねばなるまい。それは、東京裁判における張作霖爆殺事件の位置づけを明らかにすることにもつながるからだ。

一九二八年は、第二次山東出兵やそれに続く濟南事件（一九二八年五月）^①、張作霖爆殺事件（同年六月）^②など、多くの国際問題が勃発した年である。また、国内では共産党の一斉検挙（三・一五事件）^③が行なわれており、さらに国際条約とのかかわりで述べるならば、不戦条約が締結（同

年八月)されたのもこの年のことである。このように、一九二八年をもつて日本が侵略戦争の準備、遂行を開始したと検察側が判断した根拠としては、張作霖爆殺事件以外にも、それなりに説得力のある理由がいくつか列挙できる。

しかし、起訴状作成の段階でどの事件が「決定打」と見なされたかについては諸説が錯綜し、いまだはっきりとしたことはわかっていないといわざるを得ない。

二 田中上奏文

さて、東京裁判で日本の侵略戦争の共同謀議を立証する証拠として、いわゆる「田中上奏文」(田中メモランダム)が用いられた、という説がもつとも荒唐無稽なものとしてあげることができるよう。「田中上奏文」とは、一九二七(昭和二年)の東方会議の決定により、田中義一首相が天皇に対滿蒙政策を上奏したという「秘密文書」を指す。日本国内でも戦前からその存在は知られていたが、たわいのない「偽書」という理解が一般的であった。だが、敗戦後、同文書は一時的に「脚光」を浴びていた。一九四六年三月一二日付の「天声人語」では、次のように述べられている。

日本軍閥の東亜侵略案を纏めたテキストと噂せられた田中覚書(タナカ・メモランダム)が十数年振りで組上のものとなつてゐる
▼真贋の程は保障の限りでないが、軍閥の横暴を芽生えの裡に摘み取らなかつた罪の一半は田中義一大将が負うべきものかも知れぬ▼
同大將は昭和三年の奉天皇姑屯に於る張作霖爆殺の頃は政友会総裁として首相と外相を兼ねていたが、事件の責任者たる某大佐を軍法會議に附して嚴重処罰すべき旨を奏上していたにも拘らず、時の陸相白川義則大將が帷幄上奏を試みて犯人を行政処分^①に附する旨を明かにしたのであつた▼そこで田中首相に御下問があり、話が違つてはないかといふ訳で、忽ち同首相は恐懼して(中略)辭職して了つた▼何故に田中首相が白川陸相を抑へて、馬謖を斬らなかつたか▼陸相が首相に叛き、下僚軍閥が中央の統制に服しない宿弊は茲に端を

發したとも見られ、この意味で田中大將の立場は氣の毒でもあつたが、その責任は責任として軍閥侵略史の第一巻に大書せらるべきものである。

ここでは、田中上奏文の真偽の程は明らかではないとしても、それに関連させるかたちで、田中内閣期におこつた張作霖爆殺事件の処理を誤つたことが指摘されていた。ちなみに、この天声人語からは、朝日新聞が同事件の真相を東京裁判開廷前の段階ではほぼ正確に把握していたことがはっきりとわかる。この点でも極めて興味深い内容である。

さて、それでは東京裁判では田中上奏文はどのように扱われたのか。共同謀議の立証段階において、検察側証人の岡田啓介(元首相、田中内閣の海軍大臣)に対し、清瀬一郎弁護人が、次のような質問を行つてゐる。

清瀬弁護人 ……田中が最後の計算ヲ持ツテ居タアリマスガ、是ハ世間デ云フ「田中メモリアル」トイッタヤウナモノヲ指シテ居ラレルノデアリマスカ

岡田証人 私ハ「田中メモランダム」ト云フモノヲ見タコトガナイノデアリマス、私ハサウイウモノハナイト信ジテ居リマス

なぜ清瀬が、ここで田中上奏文について質問を行つたのかは不明である。だが、このときの弁護側の動向を考える上で、日本人の殆どが「張作霖爆殺事件が日本軍の謀略であつたことを知らなかつた」という事実を念頭に置かなくてはならない。日本政府は、同事件は中国の便衣隊の犯行であつたという公式見解を崩したわけではなく、しかも事件から一八年も時間が経過していた。弁護側が張作霖爆殺の「虚構」を信じていたとしても、それほど不思議は無い。それゆえこの段階では「田中上奏文」も「張作霖爆殺事件」も等しく中国側の謀略として否定することを弁護側が考へていた可能性は否定できない。

したがつて弁護側の意図としては、検察側が共同謀議を立証するため同文書を証拠として持ち出すことを考慮した結果、岡田にこの質問をぶつけ、同文書が「偽書」であるという言質を引き出しておくことで、検察側の「機先を制する」ことを狙つたのかもしれない。

だが、弁護側の意図がいずれにあつたにせよ、次に述べる田中隆吉の

「暴露」が東京裁判全体の様相を大きく変えてしまったのである。

三 田中隆吉の大暴露

一九四六（昭和二一）年七月五日、東京裁判開廷から二ヶ月余りが経過したこの日、一人の人物が検察側の証言台に立った。その人物の名は田中隆吉、開戦時の陸軍省兵務局長に地位にあった人物である。田中が証言台に座ったとき、被告席の陸軍軍人たちの間からはどよめきがおこったと言われている。そして、実際に彼が証言した内容は、法廷を騒然とさせるに充分過ぎる程のインパクトを持っていた。

午前十一時二分、証言台に立った田中は、サケット検事の尋問に対し、次のように答えている。

サケット検察官 一九二八年六月四日、張作霖ヲ殺シタト云フ証拠

ガ法廷ニ対シ提出サレテオリマスガ、誰ガ之ヲ殺

シマシタカ

（以下略）

田中証人

張作霖ノ死ハ当時ノ関東軍高級参謀河本大佐ノ計画ニヨッテ実行サレタモノデアリマス

すなわち、張作霖はかつての関東軍高級参謀であった河本大佐が計画、実行した「謀略」によって殺害されたという衝撃的な暴露であった。当時の新聞は、連日にわたり東京裁判の動向を伝えていたが、この暴露から一夜明けた七月六日の朝日新聞は「張作霖爆殺計画は河本参謀が指揮」という大々的な見出しを掲げるなど、新聞各紙は一斉に田中の証言を報じている。

さらに田中は、検察側証人として五日間証言を行っているなかで、張作霖爆殺のほかにも、満州事変や国家主義運動、満州国における阿片・麻薬問題、俘虜問題など、非常に多岐にわたり日本の犯罪について証言している。そのなかには、被告にとって不利になる証言も決して少なくなかった。

四 なぜ田中は真相を知っていたか

国際検察局は、東京裁判が開廷する以前から容疑者、被告を含む数百人から尋問を行っていたが、田中に対しては裁判が開廷した後も含め計三一回という、異例の長さで尋問が行われていた。第一回尋問は、四六年二月一九日に行なわれた。長文であるが引用する。

- 問 土肥原は、その謀殺に関係したのでしょか。
- 答 そうは思いません。問題の殺害は、ごく少数の日本人将校によって行なわれたのです。
- 問 彼らのなかの何人かについて、それがだれであったか知っていますか。
- 答 はい、確かに知っております。当時の関東軍の高級参謀です。それはだれですか。
- 問 河本大佐大佐です。
- 答 彼は今なお生存しておりますか。
- 問 生存しています。
- 問 彼の所在はどこですか。
- 答 山西（支那山西省太原）です。彼はそこに住んでいます……彼が、工兵隊の将校たち何人かを率いて、北京（奉天）の西すぐ近くの鉄道交差点に架かっている橋に爆弾を仕掛けて張作霖を殺害したのであります。
- 問 その交差点は、一方の鉄道が橋の上で他方の鉄道を跨いで交叉している地点でしたか。
- 答 そうです。彼は、下側の位置で殺害されました。
- 問 彼の列車は、地上面に敷設された鉄道上を走っていたのですか。
- 答 はい、そうです。
- 問 そして、爆薬は、彼の列車が走っていた鉄道のの上に架けられた鉄橋に固定されたのですか。
- 答 はい、そうです。

問 彼の列車が鉄橋の下を通過したその瞬間に爆薬が点火された、
そういうことですか。

答 はい、そうです。

そして同年五月一八日に行なわれた第二四回尋問で、再び同事件について詳しい尋問がなされる。ここでも田中は、河本の関与についてはつきりと述べていた。

問 (エルトン・M・ハイダー―引用者) 將軍、あなたは、だれが張作霖を謀殺したか知っていますか。

答 河本大作です。

問 將軍、どのようにしてそのことを知ったのですか。

答 河本がそれについて話してくれたのです。

問 彼は、いつあなたにそのことを話したのですか。
答 私が関東軍参謀部に勤務していたころです。私は、彼が張作霖を殺害したことをその当時知っていました。……当時彼は陸軍を去り、南満州炭鉄株式会社社理事長をしていました。われわれは互いに酒を酌み交わしましたが、彼は……私が、どのような方法で張を殺害したのか、と尋ねると、彼はそれについて一時始終を話してくれました。

〔中略〕

マッケンジー氏 河本はあなたに、彼が張作霖を殺害した、と言いましたか。

答 彼自身が私にそう言いました。

問 彼は、どのような方法でそれを行なったのですか。

答 河本は私に、きわめて高性能の爆弾を陸橋に仕掛けた、と言いました。〔鉄道〕交差点にです。

〔中略〕

問 あなたは、張作霖が殺害された当時、中国にいたのですか。

答 私は、北京にいました、日本大使館付でした。

問 軍が張作霖の殺害を計画したのですか、それとも、それは、この將校が個人で考え付いたことですか。

答 正確にお話します。それは、河本自らの計画でした。彼個人の

計画であつて、日本軍の計画ではありませんでした¹⁹⁾

このように、田中は張作霖爆殺事件に話題が及んだ際、同事件の首謀者として河本大作の名をすでに明言していた。さらに田中は、一連の尋問で、張作霖爆殺事件を知っているものとして、河本以外にさらに多田駿(陸軍大将)、柴山兼四郎(陸軍中将)その他数人の名前をあげていた。

一方で、なぜ田中はこれほどまでに事件の詳細を知っていたのだろうか。田中は、これらの事実を知った理由として、先述したように河本自身から話を聞いたこと、さらに兵務局長のとき、峯幸松憲兵司令官の調査報告書を読んだことなどをあげている。それらも、あるいは事実であつたかもしれないが、栗屋憲太郎は「それをそのまま信じるわけにいかない」と指摘している²¹⁾。栗屋は、張作霖爆殺事件当時、田中は支那研究員として北京に駐在し、張作霖爆殺のための準備として、張作霖の座する特別列車の編成、出発時刻などについての調査を自ら行つていた事実から、むしろ田中自身が関与者の一人であつたと指摘している。したがつて田中の証言は、単純に伝聞から得た情報というより、事件の首謀者、関係者から直接の情報を得た、というのがより正確であろう。当事者である以上、田中が詳しいことはむしろ当然であつたのである。

このように田中の証言のなかには、意図的に当事者の名前を言い換えるなどの事実を歪曲したものもあつた²²⁾し、自分が関与した部分については巧みに伏せた証言でもあつたことは確かである。しかし、田中が東京裁判で行つた証言によつてはじめて明らかになつた歴史的事実は非常に多い。田中の証言の価値は、決して小さくないのである。

一般に東京裁判では、張作霖爆殺事件に関与した有力な証人、それも事件の鍵を握る有力な証人を欠いていたとされる。そして、この事件が直接には裁判の争点とならなかつた大きな理由は、実行犯である河本が、この当時、中国山西省の軍閥、閻錫山のもとに身を寄せており、裁判に召喚することが事実上不可能であつたことが大きな理由のひとつであつたことは間違いない。しかし、先述のように、檢察側は、田中の尋問によつて張作霖の爆殺が日本軍の謀略であることは起訴状作成以前の段階で既に把握していた。さらに田中が挙げた人物の少なくとも一部は、裁判に召喚することが充分可能であつたのである。それゆえ、なぜ

検察側が証人として召喚を求めなかったのか、という点が、今後解明されるべき課題であるといえるだろう。

五 河本は如何なる形で裁き得たか

これまでみてきたように、河本が日本国内か、少なくとも連合国の支配地域内にいたならば、戦犯として法廷に立っていた可能性は充分にあったといえる。では、河本は如何なる訴因によって起訴されたのだろうか。

おそらく、河本もまた他の被告と同様に、「平和に対する罪」が適用されることになったであろう。具体的には訴因第一「東アジア・太平洋等支配を目的とする侵略戦争の全般的共同謀議（一九二八年—一九四五年）から第四まで、そして訴因第六「中華民国に対する侵略戦争の計画・準備」、さらに中国侵略に関連する訴因第一八、一九、二七、二八が該当するであろう。河本は満州事変の段階で既に現役の軍人ではないが、その後も民間人ながら中国大陸における日本軍の謀略に荷担していたからだ。よって、仮に河本が東京裁判の被告であったならば、中国での謀略事件の責任を問われた土肥原賢二のケースに近い形で有罪が認定されたように思われる。

しかしその一方で、東京裁判の時点で事件に主体的に関与した人物が一人だけ存在していたことを見逃すわけにはいかない。あるいは、その人物の存在こそが、同事件が単独の訴因とならなかった理由であったのかもしれない。その人物は、昭和天皇である。

六 張作霖爆殺事件の「訴追」と「免責」

戦後、首相の地位にまで登りつめた鳩山一郎は、東京裁判のさなか、検察局にある資料を届けている。その中には、張作霖爆殺事件をめぐる極秘資料で、白川義則陸軍大臣の田中首相宛報告書や、田中首相や白川陸相の昭和天皇への「内奏写」や「上奏案」などが含まれていた。なかでも、白川陸相の天皇への「内奏写」は、張作霖爆殺の首謀者が河本であ

ることを明言していた。

田中内閣の内閣書記官長であった鳩山は、事件の真相と、処理をめぐる政府内部の事情を熟知していた。これらの資料を提出した鳩山の意図は完全にはわかっていないが、自ら資料を積極的に示すことで、東京裁判における自身の弁明と責任回避を試みたのかもしれない。

しかし、この資料は証拠として東京裁判で活用されることはなかった。それは、キーンンを始めとする国際検察局は、マッカーサーの意向を受けて、天皇の免責と不訴追の方針をこのとき既に固めていたからである。さらに天皇自身が、自らの「叱責」によって内閣総辞職という結果をもたらしたことを反省し、「この事件あつて以来、私は内閣の上奏する所のものは仮令自分が反対の意見を持っても裁可を与えることに決心した」と述べていた。だがこの言葉は、「内閣の決定を私が裁可したのは立憲君主下に於る立憲君主として已むを得ざることである。もし己が好む所は裁可し、好まざる所は裁可しないとすれば、之は専制君主と何等異なる所はない」という発言と対をなすものであった。すなわち、開戦責任をはじめとする自らの戦争責任に対する弁明の論理である立憲君主としての天皇像を構築するために、張作霖爆殺事件は起点として必要不可欠であったのである。

だがその一方で、張作霖爆殺事件は、扱いによっては日米合作によって実現しつつあった天皇不訴追の方針を蒸し返す「諸刃の剣」にもなりかねなかった。何故なら、天皇は張作霖爆殺の犯人が日本軍人であることを知っていたこと、そのうえで事件を不問に附すことを天皇自身が認めていたという事実を、これらの資料は明白に示していたためである。こうして鳩山の資料は、闇に葬られたのであった。

すなわち張作霖爆殺事件もまた、東京裁判における「免責」の論理が作用した事件でもあったのである。

注

(一) 本稿で用いる「満州」とは、張作霖の支配地域であった、中国東三省（奉天・吉林・黒龍江）及び東部内蒙古の熱河を加えた地域を

指す。

- (2) 田中義一伝記刊行会編『田中義一伝記』下(原書房、一九八一年〔昭和三十三年刊の複製、原本は高倉徹一編〕、一〇三〇頁、河合弥八『昭和初期の天皇と宮中 侍従次長河合弥八日記』第二巻(岩波書店、一九九三年)、二二一頁。

- (3) 原田熊雄『西園寺公と政局』第一巻(岩波書店、一九五〇年)、一頁。

- (4) 前掲書、一一頁。

- (5) 前掲『田中義一伝記』下、一〇三九頁。

- (6) この問題に象徴されるような、張作霖爆殺事件と昭和天皇とのかわりについては、秦郁彦『オラが総理』を更迭した青年君主の『熟慮』『プレジデント』(一九八五年九月号)によって端緒が付けられたのち、天皇の政治行動と責任の是非を巡って、大江志乃夫と永井和による論争に発展する。

大江は、実質的に田中を罷免に追い込んだ天皇の判断は、立憲君主として正しい判断であったか、という点から問題を提起した。大江は、同事件を「国務ではなく、統帥権の問題として処理されなければならぬ事件」であったと位置づけたうえで、この問題は「統帥権」の問題であり、天皇は立憲君主としての責任を果たすべきで、この事件で田中を怒ったのは筋違いであり、天皇は「統帥権の運用を誤った」とする、「新解釈」をもたらしただった。さらに大江は、「このとき昭和天皇が統帥権の運用を誤り、陸軍に対して統帥権者としてなすべきことをしなかったため、陸軍は免責され、このような前例を天皇が作ったことによつて軍部の独走に対する最初の歯止めがはずされ」と論じたのである(大江志乃夫『張作霖爆殺』〔中公新書、一九八八年〕)。

一方、こうした「新解釈」に、真っ向から反論を試みたのが永井和である。永井は、「本書〔張作霖爆殺―引用者〕で展開されている『新見解』は、じつはいくつかの誤った認識の上に組み立てられた、一種の謬論に過ぎない」と述べる。永井は、立憲君主としての天皇が大江の要求どおりに行動するためには、昭和天皇は戦前期に

許された君主の行動パターンを大幅に逸脱する必要があるとする。しかし「補弼親裁構造」の下で、基本的に「受動的君主」であることを要求されている昭和天皇に対し、「受動的君主」の殻を破って「能動的君主」として行動することを要求しているに等しく、「大江のように『積極的能動的君主』たれと、立憲君主の親政論を唱えることも、それが無意識の内に戦前天皇制における天皇の『受動的君主』性を頭から排除している点では、『補弼親裁構造』の把握に失敗」しており、受け入れることはできない」と結論づけている(永井和『青年君主昭和天皇と元老西園寺』〔京都大学学術出版会、二〇〇三年〕)。

筆者は、こうした先行研究を踏まえたうえで、昭和天皇が田中に「叱責」を加えた理由を、現時点では次のように考えている。

田中に対する天皇の不信任の意向そのものは、昭和天皇が田中に責任をとらせても良いかと牧野に下問し、一度西園寺の了解が得られた時点で(土壇場で西園寺はその意見を撤回した)、ある程度既定路線であったと言っている。すなわち、天皇の田中への不信任の意志そのものは、決して天皇の突発的な反応ではなかったのである。そして、事前の打ち合わせを越えた「強い語気」で田中に責任を取るよう天皇が迫ったのは、首相としての責任を取ろうとせず、とにかく問題をうやむやにしたいと云う田中の態度に怒りを覚えたためであったのではないだろうか。

- (7) 事件に関する当時の報道と検閲状況の詳細については、横島公司『昭和初期における新聞報道の側面―満州某重大事件と検閲問題―』〔地域と経済』第三号(札幌大学経済学部附属地域経済研究所、二〇〇六年)を参照のこと。

- (8) 斎藤良衛『張作霖の死』〔会津短期大学学報』第五号(一九五五年)、白井勝美『張作霖爆殺の真相』〔別冊知性 秘められた昭和史』(河出書房、一九五六年)、さらに伝記の体裁ではあるが、平野零児『満州の陰謀者 河本大作の運命的な足あと』(自由国民社、一九五九年)、相良俊輔『赤い夕陽の満州の野が原に―鬼才河本大作の生涯』(光人社、一九七八年)などが挙げられる。これらは、今日からみ

ればむしろ資料的価値を有するといえよう。

(9) このように研究が大きく進展した背景には、事件関係者による証言や、新資料の発見が相次いでなされたことが挙げられる。主要なものとして、井星英「張作霖爆殺事件の真相(一)」「(五)」『芸林』三巻一号、三二巻一号(芸林会、一九八二年三月)一九八三年三月、栗屋憲太郎「張作霖爆殺と鳩山一郎の嘘」『東京裁判論』(大月書店、一九八九年)、NHK取材班、臼井勝美「張学良の昭和史最後の証言」(角川書店、一九九一年)、伊香俊哉「昭和天皇・宮中グループの田中内閣倒閣運動」『歴史評論』第四九六号(一九九一年八月)、佐藤元英「昭和初期对中国政策の研究」(原書房、一九九二年)、中園裕「政党内閣期に於ける昭和天皇及び側近の政治的行動と役割——田中内閣期を中心に——」『日本史研究』三八二号(一九九四年六月)、立命館大学西園寺公望伝編纂委員会「西園寺公望傳」第四巻(岩波書店、一九九六年)、陸俤「張作霖爆殺への道——日張関係の歴史の展開過程(二)」『国際文化研究紀要』第二巻(横浜市立大学大学院国際文化研究科、一九九六年)、服部龍二「張作霖爆殺事件における関東軍上層部——河本大作供述書(一九五三年四月一日)を中心として——」『六甲台論集』第四三巻第二号(一九九六年一月)、増田知子「天皇制と国家」(東大出版会、一九九九年)、ハーバート・ビックス、吉田裕監修、岡部牧夫・川島高峰訳「昭和天皇」(講談社、二〇〇二年)、白石博司「張作霖爆殺事件——河本大作関東軍高級参謀の真意」『戦史研究年報』第六号(防衛研究所、二〇〇三年)、拙稿「昭和初期における新聞報道の一面——満州某重大事件と検閲問題——」。

(10) 現在においても、同事件に対する「真相」の提起は後を絶たない。ドミトリ・P. プロホロフ内藤泰朗「張作霖爆殺はソ連の謀略」と断言するこれだけの根拠「正論」(二〇〇六年四月号)、瀧澤一郎「昭和史の定説を覆す『ソ連謀略説』の大検証 張作霖を『殺った』ロシア工作員たち」『正論』(二〇〇六年五月号)、「張作霖爆殺の犯人はソ連諜報員か(総力特集 ヒビ割れ始めた『歴史の鑑』 新史料発掘あの戦争の仕掛人は誰だったのか?!——白熱の激論七時間——」『諸

君」(二〇〇六年六月号)。しかしながら、これらの研究は、実行犯である河本自身を含む関係者の証言との矛盾はもとより、既存の研究蓄積によってもたらされた「定説」を否定するには、あまりに論証が不足しているというよりない。むしろこれらの研究の主眼は、同事件における日本の謀略性を否定することにあるように思われる。

その一方で、近年同事件についての再評価の試みがいくつかなされている。秦郁彦「張作霖爆殺事件の再考察」『政経研究』第四十四巻第一号(日本大学法学会、二〇〇七年)、井星英「秦郁彦氏の『張作霖爆殺事件の再考察』に対する疑問」『藝林』第五八巻一号(藝林会、二〇〇九年)。

(11) 新田満夫編「極東国際軍事裁判速記録」第一巻(雄松堂、一九六八年)、五〇頁。なお「共同謀議罪」とは、二人以上の者が犯罪行為の遂行について合意し、そのうちのあるものが、犯罪を実行することに対する罪である。英米法では、不法な行為について合意の形成過程のいずれかの段階でかわった事実があれば、「一度も会っていない」とも「一網打尽に犯罪は成立し、また、遂行に直接関与せずとも同様に成立するという、非常に問題の多い法概念であった。なお東京裁判では、満州事変、日中戦争、太平洋戦争をはじめとする「個々の戦争についての共同謀議」も包含し、全て全般的共同謀議に含まれるという見解が採られた(栗屋憲太郎「東京裁判への道」上[講談社選書メチエ、二〇〇六年]を参照)。

(12) ここで河本大作の実名を挙げず「某大佐」と記しているのは、この段階では張作霖爆殺事件について内務省警保局から発せられた懇談命令が遵守されていたためであろう(前掲「昭和初期における新聞報道の一面——満州某重大事件と検閲問題——」を参照)。

(13) 前掲「極東国際軍事裁判速記録」第一巻、二五八頁。

(14) 前掲「昭和初期における新聞報道の一面——満州某重大事件と検閲問題——」を参照。

(15) 前掲「極東国際軍事裁判速記録」第一巻、二七七頁。

(16) 「朝日新聞」、一九四六年七月六日付。

(17) 前掲『極東国際軍事裁判速記録』第一巻、二二七頁。また、このときの様子を重光葵は、「田中隆吉少将証言台に立ち、センセーショナルを起こす」と記し、さらに「証人が被告の席を指差して、犯人は彼なりと云うも浅まし」と書いている。東條もまた日記に「田中証言真に論外」と書いている。被告たちの田中に対する憤懣は、相当なものであったに違いない。

(18) 栗屋憲太郎編『東京裁判資料・田中隆吉尋問調書』（大月書店、一九九四年）、一〇一～一四頁。

(19) 前掲書、二二〇～二二三頁、二二八～二二九頁。

(20) 前掲書、三六六頁。

(21) 前掲『東京裁判への道』上、一九九頁。

(22) 例えば、田中は張作霖爆殺事件に東條が関与していると述べているが、それは誤りである。また武藤章や土肥原賢二に対する評価は、不当とすら言えるほど低いものであるが、これらはみな個人的怨恨によるものと言われている。

(23) 弁護側は、「田中少将の証言の根拠は、存在しない文書と死人であり、確かめようのないものばかりではないか」と反対の声をあげた、とされる（児島襄『東京裁判』（中公新書、一九七一年）。しかし多田駿は、この当時日本国内において、証言台に立つことは必ずしも不可能ではなかった。

(24) 田中への尋問の後、尋問官は河本の逮捕、日本送還の要請を検察局に提出している。しかし、河本送還のGHQからの要請は、閻錫山が河本をかばったため実現しなかった（前掲『東京裁判への道』上、一八三～一八四頁）。後に河本は中国政府の手で裁判にかけられている。その詳細については、前掲「張作霖爆殺事件における関東軍上層部―『河本大作供述書』（一九五三年四月一日）を中心として―」、「張作霖爆殺の全貌、河本大作大佐の供述書を手」を参照。

(25) 直接的には、張作霖を殺害したことが第一に問われるべきであろうが、言うまでもなくこうした明らかな犯罪行為は、国際法を用いて裁く以前に、国内法において裁かれるべき事柄であった。すなわ

ち本来ならば、河本は殺人犯として、国内の裁判所（軍法会議）で裁かれていなければならなかったのである。

(26) 東京裁判における訴因の詳細については、栗屋憲太郎『東京裁判への道』下（講談社選書メチエ、二〇〇六年）、日暮吉延『東京裁判の国際関係』（木鐸社、二〇〇二年）などを参照。

(27) 河本が軍を離れてからの動向については、森克己『満州事変の裏面史』（国書刊行会、一九七六年）、前掲『満州の陰謀者 河本大作の運命的な足あと』、前掲『赤い夕陽の満州の野が原―鬼才河本大作の生涯―などに詳しい。

(28) 寺崎英成『昭和天皇独白録 寺崎英成御用掛日記』（文藝春秋、一九九一年）、一三三頁。

(29) 前掲書、一三六頁。

(30) 一連の鳩山が提出した資料には、「田中内閣ト張作霖爆死事件」という鳩山の手記が含まれており、このなかで鳩山は、田中首相が事件処理の不手際を天皇に叱責されて内閣総辞職を余儀なくされたという事実を隠すため、張作霖爆殺についての責任は軍部、特に関東軍にあり、田中内閣はこれに関与していないという「虚偽」の説明をしていた（前掲『東京裁判への道』上、九四～九五頁）。

（本学文学研究科史学専攻博士課程後期課程）